

「小説を楽しむ」

2021年04月23日

N・Kさんが「信仰的な本ばかり読まないで、こんな本も読んでみなさい」と5冊の本を貸してくれた。楽しく読ませていただいた。するとまた、高山羽根子著『首里の馬』と馳星周著の『神（カムイ）の涙』を送ってこられた。私は信仰的な本ばかりを読んでいる訳ではない。信仰に関わる雑誌は『信徒の友』、『福音と世界』、『時の徴』を読んでいる。特に『時の徴』は愛読している。これらの雑誌に紹介されている本の中から読んでみたい本があったら、たまに注文するくらいで、キリスト教書、神学書は、本当に読まなくなった。聖書は、毎日熱心に読んでいる。

ホームページに時々、読んだ本の書評らしきものを書いているが、最近読んだ本を本棚で見たら、下記のような本があった。斎藤美奈子著『忖度しません』、津田左右吉著『古事記及び日本書紀の研究 [完結編]』、内田樹著『コモンの再生』、福島泰樹著『「恋と革命」の死 岸上大作』、森本あんり著『異端の時代—正統のかたちを求めて』、マルクス・ガブリエル著『新時代に生きる「道徳哲学」』、『つながり過ぎた世界の先に』などである。何の脈絡もない。本屋で見つかり、新聞や雑誌の書評を見て、読みたいと思った本を入手している。確かに、私の本棚は潤いがいいようだ。上記の本で、楽しく読めたのは、未来を明るく展望するマルクス・ガブリエル氏の本くらいであった。

N・Kさんが貸してくれた『首里の馬』は既に読んでいた。もう1冊の『神（カムイ）の涙』は「カムイ」という言葉からアイヌの物語であることが分かる。興味深く読んだ。北海道屈斜路路の近くに住むアイヌの木彫り名人作家の平野敬蔵を中心に出来事が回る。木彫りの木材を求めて山に入ると、地主から文句を言われる。彼は「この辺の山はみんな、元々アイヌのものだった」と言う。明治以降、アイヌのコモン（共有地）は政府に略奪された。啓蔵はアイヌの文化を生き、自然に対し深い敬意を持ち、アイヌの自負と誇りを持っている。しかし、彼の妹も娘もアイヌであるためにいじめと差別を受けることを嫌い、アイヌであることを知られない都会に出て行った。同居している高校生の孫の悠も一日も早く出ていきたいと毎日、スーツケースを詰め替えている。そこへ、啓蔵の弟子になりたいと尾崎雅比古という青年が訪ねて来る。彼は友だちと、東電の社長が原発事故の責任を取らないことを怒り、社長を拉致し、友だちが誤って殺してしまったので、北海道に逃亡して来た青年である。彼は啓蔵と血の繋がった者であることを知る。啓蔵のアイヌを誇る生き方と北海道の自然の美しさに魅せられていく。社長殺害に関わった罪を償った後、啓蔵のもとに戻ってくる。啓蔵と雅比古と悠の3人は新家族を形成し、アイヌとして生きる道を選び取っていく。出来事は様々だが、自分の居場所を見出していく小説であった。

町田そのこ著『52 ヘルツのクジラたち』は本屋大賞1位を受賞し、私の故郷大分県を舞台にしていると聞いて、読んでみた。52ヘルツの高周波で鳴くクジラの声は、他のクジラたちに届かない。世界で一番孤独なクジラと言われている。このクジラをモチーフに、人に届かない声を発する人々を描いている。家族に搾取されて苦しむ女性・貴瑚は大分県の漁村に一人で暮らし始める。そこへ、母親から「ムシ」と呼ばれて虐待され、言葉を失った少年と出会う。二人は心を通わせ、互いの声が聴ける間柄になり、少年は言葉を回復していく。登場する人物は皆、悲しさ、寂しさをかこっているが、声を聴き分けようと必死である。貴瑚が少年に「わたしはあんたを救おうとしてたんじゃない。あんたと関わることで、救われてんだ」というセリフが、この小説のキーワードである。可哀そうだから同情するのではなく、関わることで他人の声を聴き取る自分の救いを見出すのである。